

祝

小山実稚恵先生、デビュー30周年おめでとうございます

株式会社松尾楽器商会 代表取締役 松尾治樹



STEINWAY & SONS

松尾楽器商会ではこれまで60余年、様々な音楽シーンにスタインウェイをお届けしてきました。

アーティストと共に歩み続け、常に『最高の響き』を追求しています。

スタインウェイのことなら、ぜひ松尾楽器商会にお任せください。



スタインウェイのことなら何でもカスタマーコールまで

カスタマーコール ☎0120-004-331(11:00～18:00 年中無休)

H. Matsuo
SINCE 1953

—— スタインウェイ&サンズ関東・関西地区正規ディーラー ——

株式会社 松尾楽器商会

H. Matsuo's Showroom

東京本店 Tel.03-3539-1711

西宮北口店 Tel.0798-68-0160

東京都千代田区有楽町1-5-1 日比谷マリンビルB1(日比谷交差点角) 兵庫県西宮市高松町3-3ジオタワー西宮北口内(県立芸術文化センター向い)
(平日)11:00～20:00 (土日)11:00～19:00 年中無休 (火～金)10:30～18:30 (土日)10:30～18:00 月曜定休

<http://www.h-matsuo.co.jp/>

f 松尾楽器商会公式facebookページ <http://www.facebook.com/matsuo.since1953> 「いいね!」ボタンクリックお願い致します! Like

30th
MICHIE
KOYAMA

小山実稚恵

デビュー30周年記念～秋～

2015.11.5[木] 19:00開演 サントリーホール

Thursday 5 November 2015, 7p.m. Suntory Hall

ショパン:ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 op.11

Chopin: Piano Concerto No.1 in E Minor, op.11

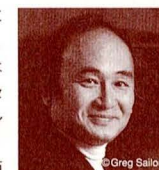
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 op.18

Rachmaninov: Piano Concerto No.2 in C Minor, op.18

広上淳一指揮/NHK交響楽団

Junichi Hirokami, Conductor/NHK Symphony Orchestra, Tokyo

広上淳一◎東京生まれ。東京音大指揮科に学ぶ。1984年第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールに優勝し、国際的な活動を開始。91～95年ノールショピング響首席指揮者、98～2000年リンブルク響首席指揮者、97～2001年ロイヤル・リヴァプール・フィル首席客演指揮者、91～2000年日本フィル正指揮者、06～08年には米国コロンバス響音楽監督を歴任する傍らフランス国立管、ベルリン放響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、コンセルトヘボウ管、ロサンゼルス・フィル、モントリオール響、イスラエル・フィル、ロンドン響、ウィーン響、サンクトペテルブルク・フィルなど欧米各地のオーケストラへ客演。国内では全国各地のオーケストラはもとより、サイトウ・キネン・オーケストラ、水戸室内管弦楽団へも客演している。オペラ指揮でもシドニー歌劇場におけるヴェルディの《仮面舞踏会》や《リゴレット》が高く評価されたのをはじめ、近年では藤原歌劇団《椿姫》、日生劇場《フィガロの結婚》《アイナダマール》、新国立劇場《椿姫》《アイダ》等が記憶に新しい。現在、京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージック・アドバイザー。2015年4月同郷とともにサントリー音楽賞受賞。さらに5月にはチェコ、ドイツ、オランダ、イタリアを巡り絶賛を博した。東京音楽大学指揮科教授。



NHK交響楽団◎NHK交響楽団の歴史は、1926年10月5日にプロ・オーケストラとして結成された新交響楽団に遡る。その後、日本交響楽団の名称を経て、51年に日本放送協会(NHK)の支援を受けることとなり、NHK交響楽団と改称。この間、ドイツからジョセフ・ローゼンストックを専任指揮者として迎え、日本を代表するオーケストラとしての基礎を築いた。演奏活動の根幹となる定期公演は27年2月20日の第1回予約演奏会に始まり、第2次大戦中も中断することなく続けられた。以来、今日に至るまで、ヘルベルト・フォン・カラヤン、エルネスト・アンセルメ、ヨーゼフ・カイルベルト、ロヴロ・フォン・マテチッチなど世界一流の指揮者を次々と招聘、また、話題のソリストたちと共演し、歴史的な名演を残している。



近年NHK交響楽団は、年間54回の定期公演をはじめ、全国各地で約120回のコンサートを開き、その演奏は、NHKのテレビ、FM放送で日本全国に放送されるとともに、国際放送を通じて欧米やアジアにも紹介されている。また、2013年8月にはザルツブルク音楽祭に初出演するなど、その活動ぶりと演奏は国際的にも高い評価を得ている。現在N響が擁する指揮者陣は、首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィ、名誉音楽監督シャルル・デュトワ、桂冠指揮者ウラディーミル・アシュケナージ、名誉指揮者ヘルベルト・ブロムシュエッテ、名誉客演指揮者アンドレ・プレヴィン、正指揮者外山雄三、尾高忠明。



平成27年度(第70回)文化庁芸術祭参加公演

◎小山実稚恵のプロフィールは冊子1ページに記載しています。

Program Note

寺西基之(音楽評論家)

ショパン:ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 作品11

フレデリク・フランソワ・ショパン(1810-49)が初期のポーランド時代に書いた2曲のピアノ協奏曲は、天才ピアニスト・作曲家として囁まれていた若き日の彼の早熟ぶりを示す傑作で、古今のピアノ協奏曲の中でもとりわけよく演奏されている。2曲ともに19世紀のいわゆるヴィルトゥオーゾ協奏曲のスタイルをとっており、独奏とオーケストラとがシンフォニックに絡むというより、独奏の名技と音楽性を前面に押し出し、オーケストラがそれを彩るといった独奏中心の書法が顕著である。

本日はそのうちの第1番ホ短調が演奏されるが、実はこれは出版が先になったために第1番の番号が付けられたもので、1829年に歌手をめざしていた初恋の相手コンスタンチワ・グワトコフスカを想って書かれた第2番へ短調に引き続いて、1830年(20歳)に作曲された実質的に第2作目の協奏曲である。公開初演は同年10月11日ワルシャワにおいてショパン自身のピアノでなされたが、この演奏会は、外国に移って国際的に活動を行おうとしていたショパンのために開かれた壮行会的なコンサートで、憧れのコンスタンチワも出演した。彼はこの演奏会の後、11月ポーランドをあとにする。そして以後母国を常に想いながらも、ついに生涯帰国する機会を失ってしまう。その意味でこの協奏曲は結果的に彼にとってポーランドへの置き土産ともいえる作品になってしまった。もちろんこの時点でそうした未来の運命は知るべくもなく、いかにも自らの

将来に期待をふくらませているような、若々しい希望とメランコリックな思いの交錯するロマン的な堂々たる意欲作となっている。

第1楽章 | アレグロ・マエストーソ、ホ短調。力強さのうちにメランコリーをはらんだ第1主題と、憧れに満ちたロマンティックな第2主題を持つ協奏的ソナタ形式。ピアニスティックな技巧が様々に生かされた長大な楽章である。

第2楽章 | ロマンズ、ラルゲット、ホ長調。この楽章についてショパン自身は友人ティトゥス・ヴォイチェホフスキ宛の手紙で「静かで少し憂鬱な、ロマンティックなもの……幾多の幸福な追憶を喚起するような、一点を見つめるような印象を起こさせ……春の美しい月光を浴びた夜のごとき……」と説明している。弱音器付きのヴァイオリンの美しい旋律に始まり、ピアノ独奏が夢想的な歌を変奏風に紡いでいく緩徐楽章で、その静謐で夢見のようなロマン的な甘美さはショパンの持つ叙情的な特質を端的に示しているといえるだろう。

第3楽章 | ロンド、ヴィヴァーチェ、ホ長調。ポーランドの民俗舞曲の一種であるクラコヴィアク風の主題を持ったロンド・フィナーレ。軽快で躍動的な運びのうちにピアノの鮮やかな名技が発揮され、華麗な盛り上がり築いていく。

なおショパンの2曲の協奏曲については、以前から管弦楽パートに関する彼の未熟さが指摘されてきたが、そうした批判は少々筋違いといえよう。独奏を引き立たせる役割を果たしながら、要所で適度に存在感を示すこの2作の管弦楽のあり方は、この時代のヴィルトゥオーゾ型の協奏曲の書法に則ったものである。そもそもこうしたタイプの協奏曲はオーケストレーションを他人が施すこともよく行なわれ、ショパンの2曲の協奏曲についても初版の管弦楽パートのオーケストレーションに彼自身がどこまで関与したかは明らかではない。最近出されたポーランド・ナショナル・エディションのコンサート・ヴァージョンは、ショパン自身や友人たちによる部分的なピアノ編曲譜などの当時の資料を改めて精査してショパンの意図により近いスコアをめざして作られた楽譜で、ピアノ・パートに従来と異なる箇所が多々あるのみならず、管弦楽パート(編成も含めて)にこれまでの版とは大きな異同がみられる。最近はこのナショナル・エディションが用いられる機会も多くなっており、本日もナショナル・エディションによって演奏される。

ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18

セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)はモスクワ音楽院のピアノ科と作曲科に学び、在学中からヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして名声を確立する。一方で卒業の年に書いたオペラ「アレコ」がチャイコフスキーに高く評価されるなど、作曲家としても早くから将来が期待されていた。

こうした中でラフマニノフは1895年に初めての交響曲を生み出した。精魂を傾けて作り上げたこの交響曲第1番ハ短調に彼は相当の自信を持っていたのだが、1897年に行なわれた初演は、批評家たちから厳しい批判を浴びただけでなく、聴衆の理解も得られなかった。今日では、この失敗は作品それ自体の問題でなく、指揮をとったグラズノフの無理解でやる気のない演奏や、当時のロシア楽壇内部の複雑な勢力関係といった外的な事情によるところが大きかったと考えられているが、いずれにしても失敗ということに変わりはなく、この交響曲に対する人々の酷評は、ラフマニノフに失意をもたらし、作曲への自信も失ってしまうのである。

といってもピアニストや指揮者としての彼の名声は陰ることはなく、1899年にはピアニストとしてロンドンで彼は大成を収める。それがきっかけで彼はここのフィルハーモニック協会から協奏曲の作曲を依頼された。しかし当時の彼はまだ作曲の筆を執る意欲が起らず、この依頼は彼にとって精神的な負担としてのしかかることとなる。

このようなラフマニノフの窮地を救ったのが精神科医ニコライ・ダーリ(ダール)博士だった。博士は催眠療法を用いて悩めるこの若き作曲家に1900年初めから独自の療法を施し、仕事への意欲と自信が湧いてくるといった暗示を与えていく。その効果はほどなく現われ始め、ラフマニノフは徐々に作曲への自信を回復するとともに、創作意欲も湧き上がるようになって、協奏曲の作曲に本格的に着手、年内のうちに第2、3楽章をまず仕上げ(この2つの楽章は同年12月に先に試演的に初演されている)、翌1901年春に第1楽章も完成させた。全曲初演は1901年11月にモスクワにおいて作曲者自身のピアノ、アレクサンドル・シロティの指揮によって行なわれたが、結果は大成功で、この作品によってラフマニノフは作曲家としての自信を取り戻し、名声を確固たるものとしたのである。

曲は、当代きってのピアノの名手ラフマニノフならではの名技性を生かしたピアノ・パートと、指揮者としてのラフマニノフの経験を窺わせる充実した管弦楽パートとが結び付くことによって、ヴィルトゥオーゾ性とシンフォニックな要素を併せ持つ協奏曲となっている。さらにラフマニノフ節というにふさわしいたづむりした情豊かな旋律、ロシアの民族的な語法もふんだんに織り込まれている。初演以来衰えることのないこの作品の人気の高さはそうした点にあるといえるだろう。

第1楽章 | モデラート、ハ短調。意表を突くような独奏ピアノだけの重々しい和音によって開始される。ロシアの鐘を想起させるこの出だしの響きは、初期に書かれたピアノ曲で人気作となった前奏曲嬰ハ短調(1892年)に通じるものがある。かつてのヒット作を想起させる導入部を置いたことは、この協奏曲に作曲家としての自らの復活をかけようというラフマニノフの思いなのだろうか。続いてヴァイオリンとクラリネットに現われる重く暗い情熱的な第1主題は、跳躍のないならかな旋律線が特徴的で、ピアノがアルペジオでこれを彩る。それに対して叙情的な第2主題はピアノが主役となる。展開部はピアノと管弦楽が拮抗しながら激しいうねりを作り出し、再現部冒頭では朗々と第1主題を奏する管弦楽に対して、ピアノは展開部に出た新しい動機を強奏して、圧倒的なクライマックスを築き上げる。

第2楽章 | アダージョ・ソステヌート、ホ長調。ラフマニノフ特有の甘く官能的な叙情の支配する緩徐楽章。弱音器付きの弦による神秘的な序奏を受けてピアノがノクターン風に弾き始め、その上にフルートが主題を吹き、クラリネットが受け継ぐ。この甘美な主部とは対照的に、中間部は落ち着きなく気分が揺れ動いて感情が昂ぶり、テンポも速まっていく。

第3楽章 | アレグロ・スケルツァンド、ハ長調。ロンド・ソナタのフィナーレで、軽快な管弦楽にピアノの技巧的なパッセージが続く序奏に始まり、やがてピアノが力強い第1主題を奏する。第2主題は管弦楽が息長く表情豊かに歌い(その後半には第1楽章第2主題が組み込まれている)、ピアノに受け継がれる。この2つの主題が交互に現われ、ピアノと管弦楽との丁寧なやりとりの中で、第1主題による緊迫したフガートをはじめ様々な展開が織り成され、大きな高揚をみせていく。

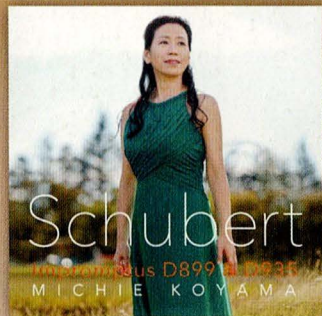
デビュー 30 周年・最新録音

小山実稚恵

シューベルト:即興曲集 D899 & D935

Schubert: Impromptus D899 & D935

2015年4月発売 ● CD: SICC 30203



DISCOGRAPHY

- | | | |
|--|--|---|
| <p>ショパン:
ピアノ・ソナタ第3番/
マズルカ第38、40、41番/
アンダンテ・スピナートと
華麗なる大ボロネーズ
SRCR 9141 / 録音: 1986年</p> | <p>リスト作品集
「ラ・カンパネラ」
SRCR 9883 / 録音: 1995年</p> | <p>ショパン:
パワード(全曲)/子守歌/舟歌ほか
SICC 10028 / 録音: 2005年</p> |
| <p>リスト:ピアノ・ソナタ
ラフマニノフ:前奏曲集
SRCR 9142 / 録音: 1987年</p> | <p>ラフマニノフ:音の絵
SRCR 1687 / 録音: 1996年</p> | <p>シューベルト:
さすらい人幻想曲/即興曲集
SICC 10042 / 録音: 2006年</p> |
| <p>リスト&チャイコフスキー:
ピアノ協奏曲第1番
小泉和裕指揮
ロイヤル・フィルハーモニック管弦楽団
CSCR 8224 / 録音: 1990年</p> | <p>夜想曲
「フォーレ、バーバー、ショパン、シューマン、
グーランド、グリーグ、ドビュッシー、
プロコフィエフ他作品収録」
SRCR 1897 / 録音: 1997年</p> | <p>小山実稚恵
国民楽派ピアノ・セレクション
SICC 715 / 録音: 1990年~2002年</p> |
| <p>ショパン:
練習曲集 作品10&25
SRCR 8528 / 録音: 1990年</p> | <p>リスト&ベルク:ピアノ・ソナタ
バッハ:パルティータ第2番
ショパン:マズルカ第36、37、47番
SRCR 2339 / 録音: 1998年</p> | <p>アンコール+ (プラス)
SICC 30073 / 録音: 1990年~2000年</p> |
| <p>シューマン:
奥内祭/クライスレリアーナ
SRCR 8900 / 録音: 1989年</p> | <p>ファンタジー
「バッハ、モーツァルト、ショパン、
シューマン、スクリャービン作品収録」
SRCR 2458 / 録音: 1999年</p> | <p>小山実稚恵 プレイズ・ラフマニノフ
SICC 878 / 録音: 1987年~2002年</p> |
| <p>スペイン・ピアノ曲集
「グラナダス、アルベニス、ファリャ作品収録」
SRCR 8913 / 録音: 1992年</p> | <p>ショパン:24のプレリュード/
「葬送ソナタ」/
序奏と華麗なるボロネーズ
(独奏ピアノ版)
SRCR 2574 / 録音: 2000年</p> | <p>ショパン:
ピアノ協奏曲第1番&第2番
ヤツウ・カスブシ指揮
シンフォニア・ヴァルツヴィア
SICC 10090 / 録音: 2009年</p> |
| <p>ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番/
バガニニの主題による狂詩曲
アンドリュ・デヴィス指揮
BBC交響楽団
SRCR 9140 / 録音: 1992年</p> | <p>ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第3番/
ピアノ・ソナタ第2番(1913年初版)
ウラディミール・フェドセーエフ指揮
モスクワ放送交響楽団
SICC 121 / 録音: 2002年</p> | <p>ショパン:
ラルゲット-ショパン・アルバム
SICC 1411 / 録音: 1986年~2010年</p> |
| <p>ショパン名曲集
SICC 1035 / 録音: 1990年、1993年</p> | <p>小山実稚恵 ベスト・アルバム
SICC 1034 / 録音: 1990年~2000年</p> | <p>ヴォカリーズ
SICC 1625 / 録音: 2011年</p> |
| <p>ラヴェル作品集
SRCR 9503 / 録音: 1993年</p> | <p>スクリャービン:
ピアノ・ソナタ全集
SICC 201~3(3CD)/
録音: 2002年~2004年</p> | <p>シャコンヌ
SICC 1626 / 録音: 2012年</p> |

Sony Music Japan International



design: Kenzaki Aizawa photo: ND CHOW creat: Yayo Miki

小山実稚恵

デビュー30周年記念



30th
MICHIE
KOYAMA



30年という時が、一息に流れた気がします。音楽活動の転機となったショパンコンクールが1985年。そこからの10年はただただレパートリーを広げ、次の10年はやりたいことに埋もれながら自分の道を確認し、次の10年で自分の道に向かって少し歩み始めることができたような気がします。音楽への愛情と気持ちは日々深まるばかり。どうしてもっと早くからこういう気持ちで音楽を見つめられなかったのかと、今、時の大切さをひしひしと感じます。今回共演させていただく2人の指揮者、大野和士さん、広上淳一さんは私が最も尊敬し、信頼し、友情をはぐくみながら共に歩んできた同世代の音楽家です。2005年の20周年記念公演では広上さんと2夜にわたって4曲の協奏曲(ショパンNo.1、スクリャーピン、チャイコフスキーNo.1、ラフマニノフNo.3)を。2010年の25周年記念公演では大野さんとブラームスの2曲(No.1、No.2)のコンチェルトを演奏しました。そして今年の30周年のコンサートは、私のコンチェルト演奏歴の中で最も深く付き合ってきた2人の作曲家、ショパンとラフマニノフのコンチェルトです。春の都響と大野さんとの共演では、「秘めたる想い」を吐露し、秋のN響と広上さんとの共演では、「未来への扉」を開く。心から音楽を共有できる幸せを噛みしめながら、この2夜の演奏会に30年の思いをのせたいと思っています。

小山実稚恵

Profile

人気・実力ともに日本を代表するピアニスト。2015年にはデビュー30周年を迎える。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクールの二大コンクールに入賞以来、今日に至るまで、コンチェルト、リサイタル、室内楽とあらゆるジャンルにおいて、常に第一線で活躍し続けている。15年には、30周年の記念公演として、東京における2回の協奏曲演奏会のほか、日本各地で数多くの記念公演を予定。また、定期的な共演で深い信頼関係を築いているフェドセーエフ指揮チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラとモスクワの定期公演で共演予定。06年から春・秋年2回ずつ17年までの壮大なプロジェクト“12年間・24回リサイタル・シリーズ”を開始。現在全国6都市において進行中である。さらに、あらたな長期的プロジェクトの計画も始動している。また、ショパン生誕200年にあたる10年のショパン国際ピアノコンクールを始め、チャイコフスキー、ロン＝ティボー、ミュンヘンなどのコンクールで審査員を務める。11年の東日本大震災以降、被災地で演奏を行っている。この被災地活動は小山のライフワークでもある。CDは、ソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結ぶ。前作『ヴォカリーズ』と『シャコンヌ』は、2作連続して『レコード芸術』の特選盤に選ばれた。15年春には、28枚目の新譜『シューベルト：即興曲集』をリリース予定。05年度 文化庁芸術祭音楽部門 大賞 / 13年度 東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門 本賞 / 13年度 レコード・アカデミー賞 器楽曲部門『シャコンヌ』



やさしさと強靱な意志

東条碩夫(音楽評論)

チャイコフスキー国際コンクール入賞が1982年、ショパン国際コンクール入賞が1985年――。

当時、筆者は、「2大コンクールに入賞した小山実稚恵」というインタビュー記事を「音楽の友」に載せたことがある。

小山さんにお目にかかったのはその時が最初なのだが、

「海外派遣コンクールで優勝したので、それならどこを受けましょって探したら、いちばん近いところにチャイコフスキーがあったのね。……モスクワでのコンクールでは、私の前のロシア人の女性が凄い勢いで弾くので、私は何て場違いなところに来てしまったのかと気落して、もう弾くのイヤだなあって……。でも弾きはじめたら、1曲ごとに拍手が起こったので気を良くして……。無邪気だったのね、あの頃は」と、それはもう、実に柔らかく、優しい話しぶりだった。

小山さんは、その頃も今も、常にそういう感じでお喋りになるかたである。これが実にいい雰囲気で、魅力的なのである。聞いている、心が癒される話し方とは、彼女のそのようなものを言うのであろう。

しかし、その柔らかいキャラから、どうしてあのように、強靱な意志力を感じさせる演奏が生み出されるのだろうか？

たとえば、彼女が最も得意とするレパートリーのひとつであり、今回の「デビュー30周年記念演奏会」のプログラムにも入っている、ラフマニノフの「協奏曲第3番」――ラザレフ指揮日本フィルとの協演(2007年10月14日・サントリーホール)の時には、ラザレフの煽りに煽る猛然たる指揮に一步も譲らず、ダイナミックでスリリングな演奏を聴かせたものだった。また、大野和士指揮読売日響との協演(13年1月8日・東京芸術劇場)でも、冒頭を神秘的な最弱音で開始したかと思えば、全曲最後の頂点では、豪壮そのものの世界をつくり出した。また、同じラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」でも、尾高忠明指揮東京フィルとの協演(08年8月5日・ミューザ川崎)の時には、強靱な気魄でクライマックスに盛り上げて行った。いずれも、見事の一語に尽きた。

さらに、08年11月15日のオーチャードホールにおけるリサイタルのことをご記憶の方も多いだろう。ショパンの「第3ソナタ」やベートーヴェンの「テンペスト」の他に、シューマンの「蝶々」やシューベルトの「即興曲」も含まれたプログラムを、彼女は「内なる叫び」として、「心の中で吹きさす風、感情の渦の中から聞こえてくる声」というテーマで表現していた。後者の2曲などは、作品の性格からみれば、必ずしもそれに当てはまらないような気もしたのだが、しかし彼女の演奏にかかれば、すべてがそのテーマに統一されるイメージを感じさせてしまうのだから、面白い。

だがこれは、彼女が常に力任せに弾いているなどという意味では、もちろんない。

10年9月3日にサントリーホールで行った「デビュー25周年記念演奏会」で大野和士の指揮する東京都交響楽団と演奏したブラームスの「ピアノ協奏曲第2番」は、沸き立つような激しい躍動とうねりを備えた、類のないほど劇的な演奏だったことは事実だ。だが同時にその演奏には、ブラームス円熟期のこの大曲の、深さと拡がり、情熱と静寂とが、これまた余すところなく示されていたのである。

前出のラフマニノフの「狂詩曲」にしても、山田和樹指揮日本フィルとの協演(2012年9月3日・サントリーホール)では、有名な第18変奏における、これ以上はないほどの思い入れたっぷり、耽美的な表情が印象的だった。同じ日に演奏したラヴェルの2つのピアノ協奏曲でも、叙情が最高度に昇華された美しさが素晴らしかった。12年4月18日の宮本文昭指揮東京シティ・フィルとの協演(東京オペラシティ)におけるモーツァルトの「協奏曲第27番」では、この上なく温かい表情が聴かれ、さらにアンコール

で弾いた「トロイメライ」の優しい美しさは、私がこれまで聴いたこの曲の演奏の中で最高のものでさえあったのである。

このように、小山実稚恵さんの演奏では、きりりと引き締まった激しい意志が、透明で澄んだ音色のしなやかな優しさと結びついている。その音色はあくまで澄んで明晰であり、しかもまなましい生命感に満たされている。かように、一刀両断的な明快さを持ちながら、その一方で瑞々しい詩情をも失わないという――このような特徴を併せ持ち、しかもその両者が完璧なほどの均衡を保っているピアニストは、わが国には決して多くはないだろう。

2013年6月8日のオーチャードホールでのリサイタルで取り上げた、リスト編曲によるベルリオーズの「幻想交響曲」第4・5楽章の演奏などは、その「均衡」を感じさせた一例だろう。そこでは、一種の傍若無人な野性味といったものが、もう少しあからさまに表現されてもいいのではないか、という気もしたが、――しかしこれもやはり、どんなに熱狂しても決して音楽の形を崩すことがないという、彼女の美点が作用した演奏だったのではないだろうか。

そういえば、非常に興味深いことがある。フランスのナントにおける「ラ・フォル・ジュルネ」で、彼女のショパンを聴いた時(2010年1月31日)のことである。並み居るアクの強い外国人ピアニストたちの中では、彼女の演奏するショパンは、いかにも清楚で自然な音楽に聞こえたのだ。そこではあざとい誇張も怒号もなく、ショパンの持つ音楽の瑞々しさ、ハーモニーのふくよかさ、転調の豊かさなどが、何の銜もなく率直に、しかも端整な情熱をもって再現されているといった感なのであった。日本で聴くと、彼女の演奏はかなりパンチの聴いたスタイルに感じられるけれども、ヨーロッパで聴くと、それはいかにも優しく、温かいという印象が先に立つのであった。けれども、それでいいのだと思う。日本人ピアニストには、日本人でなければ聴かせられぬ、微細な表現の美しいショパン演奏のスタイルがあるはずだからだ。

プログラミングの巧さでも、小山さんのセンスは卓越しているだろう。リサイタルには、常にひとつの詩的なテーマが設けられている。2014年6月21日のリサイタルは、「舞曲の園」と題されていた。そして11月29日のそれは、「粋な短編小説のように」だった。それらは彼女自身のイメージの中で組み立てられたテーマではあろうが、しかし毎回その中に、明らかにテーマの核になっていると聞き手にも思わせる作品が据えられている。たとえば「粋な短編小説」の場合なら、3曲目に演奏されたシューマンの「ノヴェレッテン」、5曲目に弾かれたショパンの「バラード第1番」といった、「物語性」に因んだ曲であることが、誰にでも見当がつく。ただし彼女はこの他、ショパンの「スケルツォ第2番」や、D・スカルラッティの「嬰ハ短調」と「ホ長調」のソナタの中にもドラマ性を見出し、プログラムに加えていたのだ。

それらは聴き手にその概念を強制するものではないが、しかし聴き手の心の中に、ある夢想的なイメージをふくらませてくれたことは、まちがいない。あのコンサートで小山さんは、短編の数々をひとつの流れやテーマの中にまとめ、演奏の色合いの変化、語り口の変化を駆使し、コンサート全体を、ひとつの美しい物語につくりあげてしまったのである。それは、まぎれもなく「粋な」手法そのものであった。

30年の頂から未来を見る

片桐卓也(音楽ライター)

登ってみなければ高さが分からない頂があると思う。実際の山登りでも、下から見えている山塊と、登った後に見えて来るさらに高い峰の姿には大きな違いがある。小山実稚恵がプロフェッショナルとして演奏活動を始めて2015年で30周年を迎えると聞いて、そんなことを思った。この30年、いや実際にはもっと長い音楽家として時間を過ごして来た小山にとって、今、この頂の上で見えている風景はどんなものなのだろう。

1982年にソ連(当時)で行われた第7回チャイコフスキー国際コンクール、1985年にポーランド、ワルシャワで行われた第11回ショパン国際ピアノコンクールに出場し、どちらのコンクールでも決勝に残り、入賞を果たした小山。このふたつの世界的なコンクールの両方に入賞した日本人ピアニストは、今のところ小山だけである。こう書くと天才型のピアニストと思われる方も多いだろうが、実際には、小山はコツコツと音楽とテクニックとを磨いて行く努力型のピアニストだと思う。そして未来を展望しながら、次はどんな作品に取り組もうかと、いつも準備をしている、そんな感じがするのだ。レパートリーへの関心も深く、研究を怠らない。その成果として、例えば彩の国さいたま芸術劇場音楽ホールでの「スクリャービン & ラフマニノフ シリーズ」(2002年から全6回)があり、2006年から東急文化村オーチャードホールでスタートした「12年間・24回リサイタルシリーズ」がある。ピアノ・ソロだけでなく、ブラームスの室内楽を取り上げた「ブラームス室内楽プロジェクト 小山実稚恵と仲間たち」(彩の国)などのコンサートも充実していた。また協奏曲でも、ロシアの巨匠フェドセーエフとの共演など、忘れられないコンサートもたくさんある。そうした小山の活動に対しての評価も高く、2005年には文化庁芸術祭音楽部門大賞を受賞している。

30周年を迎える2015年には様々なコンサートが予定されているが、オーチャードホールでの「12年間・24回リサイタルシリーズ」はちょうど最後の3年間6回のリサイタルに入るところだ。これからはバッハの「ゴルトベルク変奏曲」、ベートーヴェンの後期ピアノ・ソナタ、シューベルトの最後の3つのソナタなど、それぞれの作曲家を代表する大作が続いて行くことになる。それも楽しみである。さて、いつも未来を見据えている小山のことだから、30周年以降にも様々なアイデアを持っているのだろう。そう思って、尋ねてみることにした。

「2015年はまず1月にシューベルトの『即興曲集』を録音します。演奏会の数はそれほど増える訳ではありませんが、記念のコンサートがいくつかあります。オーチャードホールでのリサイタルシリーズは大好きなシューベルトの後期のソナタに取り組めるので、それが楽しみです」

と小山。また、ピアニストとしての活動を中心にしながらも、これまでに取り組んだことのないテーマにも取り組みたいと考えていると言う。

「タイトルとしては『子どもたちの夢』というようなプロジェクトを企画したいと考えています。東日本大震災の後から考えて来たことですけれど、自分の人生を振り返って、それが充実していたと思えるようになるには、やはり自分が好きなことに会おうのが大事なのではないか、と思いました。それは音楽に限らず、なんでも良いと思います。美術、工芸、お菓子作りでも良いでしょう。具体的にそういう仕事をしている専門家の方々の協力も得ながら、子どもたちが自分のやりたいことに会うための機会を作る、そんなプロジェクトを考えています」

ユニークなプロジェクトになりそうだ。音楽家だけでなく多ジャンルの専門家に会おうのは子どもたちにとって大きな意味を持つだろう。

「音楽家として自分の専門外のことに出すのは、なかなか勇気の必要なことなのですが、基本的な姿勢は音楽への取り組みと変わらないし、どんなジャンルにも通じることがそこにはあると思います。まだまだ企画を煮詰めていかなければなりませんけれど、特に東日本大震災の影響を大きく受けた地方の子どもたちのために、何か出来れば良いと思います」

と小山は語る。仙台に生まれ、盛岡で育った小山にとって、東日本大震災の被災地への想いは深い。

「音楽の友」誌で2015年1月号から始まる対談シリーズ「脱力の極み」は、音楽以外の多彩なジャンルの人々とのトークが展開されて行く。そこには小山の多様なジャンルへの関心、そしてあらゆるジャンルで専門的な活動をする人達に通じる姿勢など、幅広い関心が示されるだろう。

もちろんピアニストとしても、リサイタルだけでなく協奏曲にも意欲的に取り組んで行きたいと考えている小山。その企画も考えているようなのだが、まだ具体化していないので、今後の発表を待ちたいと思う。

「最近よく思ひのは、実際の社会もそうですが、スピードが最優先のような感覚が溢れていて、音楽の世界にもそれが広がって来ているような気がします。コンクールに優勝して、パッと話題になるけれども、一過性の活動に終わってしまう可能性もあります。でも、音楽の世界は広大だし、ひとつの山を制覇したからと言って、それは大きな山脈への第一歩にしか過ぎない、あるいはまだ第一歩にもなっていないかもしれない。長い時間をかけて取り組んで行く必要があるのが音楽、芸術の世界だと思います」

プロのピアニストとして活動して来た30年。小山にとってその時間はあっという間だったのではないだろうか？ 30年と言えば、普通に会社勤めをした人と言えば、役職付きとなり、そろそろ第2の人生の設計も考える、そんな時期なのだろう。しかし、芸術の神に仕えた人間には定年もないし、役職もつかない。30年が自分にとってどのくらいの道のりなのか、実際にはよく分からないかもしれない。しかし、これまでに得た経験は、未来への羅針盤となる。その羅針盤には、私たちが想像もしないような未来への航路が示されているかもしれない。小山のこれからの活動は、ますます多彩なものになって行くだろう。



photo: ND CHOW

心の復興と共にある音楽…小山実稚恵さんと東日本大震災

黒田大介(岩手日報社論説委員)

「私はピアノを弾くことしかできない。被災地に音楽を届けたい。今の私にできることは、心を音に託して届けることしかないから。でも、みなさんが大変なときに、いいのかしら…」

2011年3月11日の東日本大震災津波から約2週間後、小山さんから電話があった。その声は逡巡し、哀しみに満ちていた。

「音楽は人の力になる、救えるって思ってきました。でも、音楽や芸術の意味が全くないくらい大変なんだ、人間はこんなに無力なんだということを心の底から痛感しました。でも、もしも音楽によって、勇気や希望を持ってくれる人が一人でもいるなら…いつでもどこどこでも飛んで行きたい」

仙台市に生まれ、盛岡市で小中学校時代を過ごした小山さん。「第二の古里」である岩手県では、沿岸部でも数多くのリサイタルを開いてきた。だが、その会場となった陸前高田市民会館、釜石市民文化会館、宮古市民文化会館は、いずれも津波で被災した。

小山さんの申し出から、被災地への強い思いと共に、その豊かな音楽性は人間性と分ちがたく結びついていることを実感した。長らく小山さんを取材し、10年12月に急逝した一戸彦太郎・岩手日報社学芸部長が生前「小山さんって本当にいい人なんだよね」としみじみ語っていたことが思い起こされた。その思いを、いつ被災地に届けられるだろうか。被災者に音楽を受容する心の余裕は生まれているのか。なお混乱が続く3月下旬の時点では分からなかった。「生か死か」の被災地において、音楽について問いかけること自体が、ためらわれた。

思いは、まずは言葉で届けられた。震災以来1カ月間、本紙文化欄は休載となっていたが、再開した4月11日付紙面を飾ったのは小山さんのメッセージだ。寄稿の依頼に、即座に答えてくれた。末尾の一文を紹介する。

「…私のピアノで、苦しく長い一日のほんの一瞬だけでも笑顔の瞬間を与えることができるなら、どこにでも行って弾かなければ。ピアノを持ち運んででも弾かなければ。微力であるかもしれないけれど、被災者の心に届くよう全力で応援し、共に歩きたいと思うのです」

その後の小山さんの軌跡は、まさにこの言葉を体現している。

念願の被災地慰問演奏ツアーは、震災から2カ月後の5月10日に釜石市、11日に宮古市で実現した。演奏に際しての小山さんの要望は「現地に負担をかけないでほしい。2公演の合間に3時間以上練習できる場所を確保してほしい」。どんな状況であろうと、一切手を抜かない。これぞプロだ。

10日の会場は、釜石市の双葉小。校舎が被災した鶴住居小の児童も共に学ぶ。体育館の小さなグランドピアノを両校児童が囲む。そこに、ドレス姿の小山さんが登場。ショパン、リスト、そして「となりのトトロ」の「さんぽ」。このために楽譜を購入して練習してきた小山さんの伴奏に合わせて歌う子どもたち。最初は小さな歌声が、歌っているうちにどんどん大きくなっていき、体育館を深い感動が包んだ。「人間って力強いなあ、これが音楽の原点なんだなあ」と小山さん。音楽の力が、まざまざと実感されたひとときだった。

釜石市から2時間半かけて盛岡市に戻ると、岩手県民会館で練習。翌11日早朝に盛岡を発ち、宮古市の磯鶏小へ。「復興を祈る癒しの演奏会」という手作り看板が迎える。ピアノは宮古市民文化会館のスタインウェイ。会館の中にあっただ

奇跡的に被災を免れ、「宮古の芸術文化復興の象徴に」という地元の熱意で体育館に運び込まれた。

小山さんは、名器ならではの繊細なニュアンスで、リスト「ラ・カンパネラ」などを披露。「復興の祈り」としての鐘の音のフレーズ。「かたちに見えない心の復興こそ、かたちをも作っていくのではないのでしょうか。平板な言葉ですが、みんなで力を合わせて進んでいきたい」。再訪を誓い、2日間のツアーを終えた。

12年3月11日、小山さんは再び岩手にやって来た。盛岡市民文化ホールでの小林研一郎指揮・東京都交響楽団との共演によるチャイコフスキー「ピアノ協奏曲第1番」。勇壮、華麗な曲想で名演数多い同曲だが、これほどまでに温かみを感じた演奏は初めてだった。震災から1年。満員の聴衆一人一人が、さまざまな思いを胸に抱いていたことだろう。長い1年、あつという間の1年、あるいは、1年前で止まったままの時間…。それぞれの心の軌跡に寄り添い、美しい色彩をまとうせるかのように、小山さんのピアノは響きを上げた。

3月12日、大槌町の吉祥寺で鎮魂のピアノ演奏会。ショパン「ノクターン」が、1年前の夜にいざなう。あの日、地上の光は失われていたが、見上げると星空が広がっていた。フィナーレは「英雄ボロネーズ」。そのリズムは力強く、でも、あくまで温かく。

13日には大船渡市の南嶺小を訪問。同校では、校舎が被災した越喜来小、崎浜小児童も学ぶ。3校児童の合同合唱団は11年11月、サントリーホールで開かれた支援コンサートに特別出演し小山さんと共演。この日、再度の共演が実現し、澄んだ歌声とピアノが響き合った。

帰途、陸前高田市民会館に立ち寄った。小山さんが03年にリサイタルを開いた会館は、津波の直撃で壊滅し、外装のみと化していた。夕刻、吹きすさぶ風の音に、音楽の不在が際立つ。

会館入り口の祭壇に手を合わせた小山さん。深い哀しみをたたえたその目の奥底に強い光を宿しつつ、言葉を絞り出した。「何度でも被災地で演奏したい。生きている限り」。

小山さんは13年、陸前高田市の高田小、山田町中央公民館などを訪問。宮城、福島両県での慰問演奏会、首都圏でのチャリティーコンサートなども含め、これまでの震災関連の演奏活動は計31回に上る。

被災地の復興の歩みは遅く、震災の記憶の風化は進む。心の復興なお遠い中、小山さんはこれからも被災地と共にあり、音楽を届け続けるだろう。そのピアノは、被災者それぞれの心の歩みに寄り添いつつ、響きを広げることだろう。



2011年5月10日 釜石市・双葉小での慰問演奏(岩手日報社提供)



2012年3月13日 大船渡市・南嶺小での慰問演奏(岩手日報社提供)



＊小山実稚恵 デビュー30周年記念～春～は、2015年4月18日〔土〕、～秋～は、2015年11月5日〔木〕、両日とも東京サントリーホールで行われます。その他の公演は、2015年公演スケジュールページをご参照ください。

小山実稚恵 デビュー30周年記念～春・秋～東京公演の聴きどころ

萩谷由喜子(音楽評論家)

2015年、垂涎の協奏曲コンサートが2公演、実現した。

桜花舞う卯月には、ショパンの2番にラフマニノフの3番を組み合わせて大野和士指揮東京都交響楽団と共演し、紅葉燃える霜月には、ショパンの1番にラフマニノフの2番を取り合わせて広上淳一指揮のNHK交響楽団と共演する。主役は、今年デビュー30周年を迎え、ショパンにもラフマニノフにもこの人ありの誉れ高い小山実稚恵さん。会場は、奇しくも彼女のデビューの翌年に東京初のクラシックコンサート専用施設としてオープンした赤坂の名館。

もしも「こんなコンサートを開いて欲しい夢のプラン」の募集があれば、絶対に第1位に選ばれること間違いなしの連続企画だ。では、どこがどれほど「夢のプラン」なのだろうか？

第1に、ショパンの姉妹協奏曲に、ラフマニノフの協奏曲の両雄を組み合わせた点がいかにプログラム巧者だ。ショパンの2曲は、彼が青雲の志を抱いてワルシャワを旅立つ直前に、地理にも政治にも文化にも多大な不利を抱えたポーランドから中央ヨーロッパに向けて誇らかに発信した音楽による所信表明だが、そこはピアノの詩人、声高なアピールではない。2曲ともショパン特有の高雅な詩情と繊細優美な楽想が横溢し、若きショパンの青春の光と影がまばゆく交錯している。2曲のうち、最初に書かれた第2番のほうがよりロマンティックで規模も小さいのに対して、実際には第2作である第1番にはポーランド人としての誇りと情熱、祖国を蹂躪する者への義憤の情さえ滲んで、力強い一面も持ち合わせ、第2番よりも少し規模が大きい。だから、可憐で愛らしい第2番には、ラフマニノフ最大の協奏曲、第3番をカップリングし、堂々とした第1番には、哀愁とリリシズムに満ちたラフマニノフの第2番を組ませてある。この取り合わせ方が実に心憎い。

第2に、ラフマニノフの名品2作、第2番と第3番が春秋に揃うことも嬉しい。第2番は20世紀生まれながら、19世紀ロマン派にも通じる甘美で哀切極まりない名旋律の宝庫だ。また、ソロ・パートにはヴィルトゥオーゾ・ピアニストだったラフマニノフにしか書けないピアニスティックな楽句がふんだんに盛り込まれている。曲の冒頭はロシア正教の教会の鐘を模したピアノの和音。第1主題の伴奏音型から移行句までソロの奏でる急速な装飾音型も小型の鐘の音の模倣だ。ラフマニノフの故郷、ロシア西部のノボゴロド地方には鐘の伝承技術が受け継がれていて、彼は幼い日から名人の鳴らす大小さまざまな鐘の響きを耳にして成長した。だから、彼の『前奏曲ハ短調』やピアノ・ソナタ第2番など他作品にも、鐘の模倣はしばしば登場する。

以前、小山さんとそんな話をしていた時、彼女が「ロシアの鐘は、日本の釣鐘のように撞木で外側から叩いて鳴らすのではなく、内側に吊るされた振り子を揺らして鳴らすのよね。」とさりと言われ、はっとしたことがある。そこまで鐘の性質について理解を深めているからこそ、彼女のラフマニノフは随所の鐘音型が迫真の響きをもって奏されるのだと密かに舌を巻いたものだ。今回の公演でも、これがひとつの聴きどころとなろう。第2楽章での木管楽器とのやりとりや、第3楽章の2つの主題の描き分けなどにも精緻な表現が期待される。

一方、第3番で注目したいのは第1楽章のカデンツァだ。これはラフマニノフ自身による、小規模なオリジナルと、大規模なオッシア(別版)の2種があり、かつてはオリジナルを弾くピアニストが多かったが、近年は絢爛豪華な和音が縦横無尽に鳴らされるオッシアが隆盛。小山さんもこのオッシアを弾くはずなので、ここの多彩な和音の響きが楽しみだ。

最後のとっておきの聴きどころは、小山さんが心から信頼を寄せるふたりの名指揮者との共演だ。先日「よい指揮者ってどんな人？」と彼女に尋ねたところ、「まず、音楽ありき。何よりも音楽を大切に全身全霊で音楽に奉仕できる人。」と答えてくれたが、大野マエストロも広上マエストロもまさにそんな名匠だ。いずれ菖蒲か杜若の春公演と秋公演。でも、迷う必要はない。どちらも聴けばよいのだから。

2015年公演スケジュール

1月 January

7[水] 19:00	音楽日和～JAF会員のための音楽会 小泉和裕指揮 新日本フィルハーモニー交響楽団 東京芸術劇場
10[土] 15:00	YMFG もみじ ニューイヤークンサート 田中祐子指揮 広島交響楽団 広島文化学園HBGホール
15[木] 19:00	神奈川フィルハーモニー管弦楽団 定期演奏会 県民ホールシリーズ第2回 サツシャ・ゲッツェル指揮 神奈川フィルハーモニー管弦楽団 神奈川県民ホール
18[日] 14:00	特別演奏会 相模女子大学グリーンホール ～ウィーンの風～ 魅せる名曲たち～ サツシャ・ゲッツェル指揮 神奈川フィルハーモニー管弦楽団 相模女子大学グリーンホール(相模原市文化会館)
25[日] 14:00	小山実稚恵 音の幻想(ファンタジー)第1回 兵庫県立芸術文化センターKOBELCO 大ホール
31[土] 14:00	府中の森クラシックコレクション 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 府中の森芸術劇場ウィーンホール

2月 February

7[土] 14:00	都民芸術フェスティバル ロッセン・ゲルゴフ指揮 東京フィルハーモニー交響楽団 東京芸術劇場
14[土] 14:00	デビュー30周年記念 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 保谷こもれびホール

3月 March

7[土] 18:30	小山実稚恵 デビュー30周年記念 リサイタル 佐賀市文化会館 中ホール
13[金] 19:00	チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ定期演奏会 ウラディミール・フェドセーエフ指揮 チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ モスクワ

4月 April

5[日] 15:00	名古屋国際音楽祭オープニング・コンサート 小山実稚恵 ラフマニノフ大コンチェルト 川瀬賢太郎指揮 名古屋フィルハーモニー交響楽団 愛知県芸術劇場コンサートホール
10[金] 19:00	日本センチュリー交響楽団 第200回定期演奏会
11[土] 15:00	飯森範親指揮 日本センチュリー交響楽団 ザ・シンフォニーホール
18[土] 14:00	小山実稚恵 デビュー30周年記念～春～ 大野和士指揮 東京都交響楽団 サントリーホール

19[日] 14:00	第53回大阪国際フェスティバル2015 提携公演 東京都交響楽団創立50周年記念大阪特別公演 大野和士指揮 東京都交響楽団 フェスティバルホール
25[土] 14:00	小山実稚恵 デビュー30周年記念 ピアノ・リサイタル 姫神ホール
28[火] 19:00	小山実稚恵 ピアノ・リサイタル ハーモニーホールふくい 小ホール

5月 May

10[日] 17:30	ラ・フォル・ジュルネ新潟 2015 「パッション～恋する作曲家たち」 ロベルト・トレヴィーノ指揮 シンフォニア・ヴァルソヴィア りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館
16[土] 14:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第19回 FFGホール
23[土] 15:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第19回 宗次ホール
30[土] 15:00	名匠フェドセーエフ指揮 チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ ウラディミール・フェドセーエフ指揮 チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ 兵庫県立芸術文化センターKOBELCO 大ホール

6月 June

3[水] 19:00	館野泉 ピアノリサイタル～ 「館野泉左手の文庫(募金)」応援プロジェクト 共演:館野泉(ピアノ) 東京オペラシティコンサートホール タケツツモリアール
5[金] 18:30	名寄市民ホール開館記念 北の星座音楽祭 札幌交響楽団演奏会 垣内悠希指揮 札幌交響楽団 名寄市民ホール
7[日] 15:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第19回 日立システムズホール仙台
9[火] 19:00	市民コンサート徳島・600回記念例会 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 徳島県郷土文化会館 大ホール(あわぎんホール)
13[土] 14:30	サントリーホール チェンバーミュージック・ガーデン2015 共演:堤剛(チェロ) サントリーホール 小ホール ブルーローズ
17[水] 19:00	NHK交響楽団 第1813回定期公演Bプログラム
18[木] 19:00	尾高忠明指揮 NHK交響楽団 サントリーホール
21[日] 14:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈ピアノ・ロマンの旅〉第19回 いずみホール
27[土] 15:00	12年間24回シリーズ〈小山実稚恵の世界〉第19回 Bunkamuraオーチャードホール

7月 July

2[木] 19:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第19回 札幌コンサートホールKitara 小ホール
4[土] 13:30	ミュージザ川崎ホリデーアフタヌーンコンサート 《ショパン・華麗なるコンチェルト》 小山実稚恵 デビュー30周年記念 曾我大介指揮 東京ニューシティ管弦楽団 ミュージザ川崎シンフォニーホール
5[日] 19:00	ショパン・華麗なるコンチェルト 曾我大介指揮 東京ニューシティ管弦楽団 さいたま市文化センター 大ホール
11[土] 14:00	びわ湖ホール名曲コンサート 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 大ホール
19[日] 19:00	'15(第28回) 夏休み 親と子のコンサート～ 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル～ 大洲市民会館 大ホール
24[金] 19:00	オーケストラ・アンサンブル金沢 第366回定期公演 フィルハーモニー・シリーズ 広上淳一指揮 オーケストラ・アンサンブル金沢 石川県立音楽堂コンサートホール

8月 August

1[土] 14:00	Kids Festa in 仙台(仮)
2[日] 19:00	大野和士指揮 仙台フィルハーモニー管弦楽団 日立システムズホール仙台
26[水] 19:00	「宮沢賢治 音楽の世界」(仮) 共演:名取裕子(語り) 岡本侑也(チェロ) 呉市文化ホール
29[土] 13:30	デビュー30周年記念 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 横浜みなとみらいホール

9月 September

6[日] 16:00	小山実稚恵ピアノリサイタル ライブポートとはしコンサートホール
18[金] 19:00	九州交響楽団 第343回定期演奏会 小泉和裕指揮 九州交響楽団 アクロス福岡シンフォニーホール
23[水・祝] 14:30	小山実稚恵 ピアノリサイタル 三重県文化会館大ホール
27[日] 14:00	小山実稚恵 ピアノ・リサイタル vol.5 ～ピアノの旅～ 那須野が原ハーモニーホール 大ホール



* 諸般の事情により掲載できない演奏会もあります。

10月 October

2[金] 19:00	札幌交響楽団 第581回定期演奏会
3[土] 14:00	広上淳一指揮 札幌交響楽団 札幌コンサートホールKitara 大ホール
6[火] 7[水]	読売日本交響楽団 下野竜也指揮 読売日本交響楽団 2公演予定
10[土] 14:00	小山実稚恵 音の幻想(ファンタジー)第2回 共演:カールデット・エクセルシオ 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール
17[土] 15:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第20回 宗次ホール
25[日] 15:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第20回 日立システムズホール仙台
28[水] 29[木]	堤剛(チェロ) & 小山実稚恵(ピアノ) デュオ・リサイタル 共演:堤剛(チェロ) 都内コンサートホール(関係者のみのクロード公演)

11月 November

5[木] 19:00	小山実稚恵 デビュー30周年記念～秋～ 広上淳一指揮 NHK交響楽団 サントリーホール
8[日] 14:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第20回 FFGホール
14[土] 14:00	小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 鳥取市文化ホール
20[金] 19:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈音の旅〉第20回 札幌コンサートホールKitara 小ホール
22[日] 14:00	小山実稚恵 12年間24回シリーズ〈ピアノ・ロマンの旅〉第20回 いずみホール
28[土] 15:00	12年間24回シリーズ〈小山実稚恵の世界〉第20回 Bunkamuraオーチャードホール

12月 December

5[土] 14:00	プレミアム・セレクト・コンサート 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル メディキット県民文化センター アイザックスターンホール
12[土] 14:00	第30回松江プラバ音楽祭 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル 松江市総合文化センター プラバホール
19[土] 18:30	第180回記念 蘭島閣ギャラリートコンサート 共演:堤剛(チェロ) 蘭島閣美術館

12年間・24回リサイタルシリーズ

「小山実稚恵の世界」

ピアノで綴るロマンの旅

24 Recitals Concluded in
2017

Bunkamura オーチャードホール

19 第19回 2015年6月27日(土) 15:00開演

～思い出のアルバム～

J.S. バッハ: カプリッチョ 変ロ長調

「最愛の兄の旅立ちによせて」 BWV.992

シューマン: フモレスケ 変ロ長調 作品20

アルベニス: 組曲「旅の思い出」 作品71より 第6曲

「入り江のざわめき」

ショパン: ノクターン 第17番 長調 作品62-1

シューベルト: ソナタ 第19番 ハ短調 D.958

20 第20回 2015年11月28日(土) 15:00開演

～究極のアリア～

シューマン: 花の曲 作品19

J.S. バッハ: ゴルトベルク変奏曲 (アリアと30の変奏曲)

ト長調 BWV.988

21 第21回 2016年6月18日(土) 15:00開演

～未来の扉を開いて～

ブラームス: ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ

変ロ長調 作品24

バルトーク: ソナタ (1926)

ベートーヴェン: ソナタ 第29番 変ロ長調

「ハンマークラヴィアー」 作品106

22 第22回 2016年11月19日(土) 15:00開演

～心の歌～

ベートーヴェン: ソナタ 第30番 長調 作品109

ブラームス: 6つの小品 作品118

シューベルト: ソナタ 第20番 イ長調 D.959

23 第23回 2017年6月17日(土) 15:00開演

～祈りを込めて～

シューマン: 幻想小曲集 作品12

ベートーヴェン: ソナタ 第31番 変イ長調 作品110

シューベルト: ソナタ 第21番 変ロ長調 D.960

24 第24回 2017年11月25日(土) 15:00開演

～永遠の時を刻む～

J.S. バッハ: 平均律クラヴィーア曲集 第1巻 より

第1番 ハ長調 BWV.846

シューマン: 3つの幻想的小品 作品111

ブラームス: 3つの間奏曲 作品117

ショパン: ノクターン 第18番 長調 作品62-2

ショパン: 子守歌 変ニ長調 作品57

ショパン: マズルカ 第49番 ハ短調 作品68-4

ベートーヴェン: ソナタ 第32番 ハ短調 作品111

◎1回券

S¥5,000 A¥3,500 B¥2,000 (税込)

Bunkamura チケットセンター 03-3477-9999 (10:00~17:30)

オンラインチケット My Bunkamura (要事前登録)

<http://www.bunkamura.co.jp/mybunkamura/> (PC・スマートフォン)

イープラス、チケットぴあでも取扱っております。

☎ Bunkamura 03-3477-3244 (10:00~19:00) <http://www.bunkamura.co.jp>

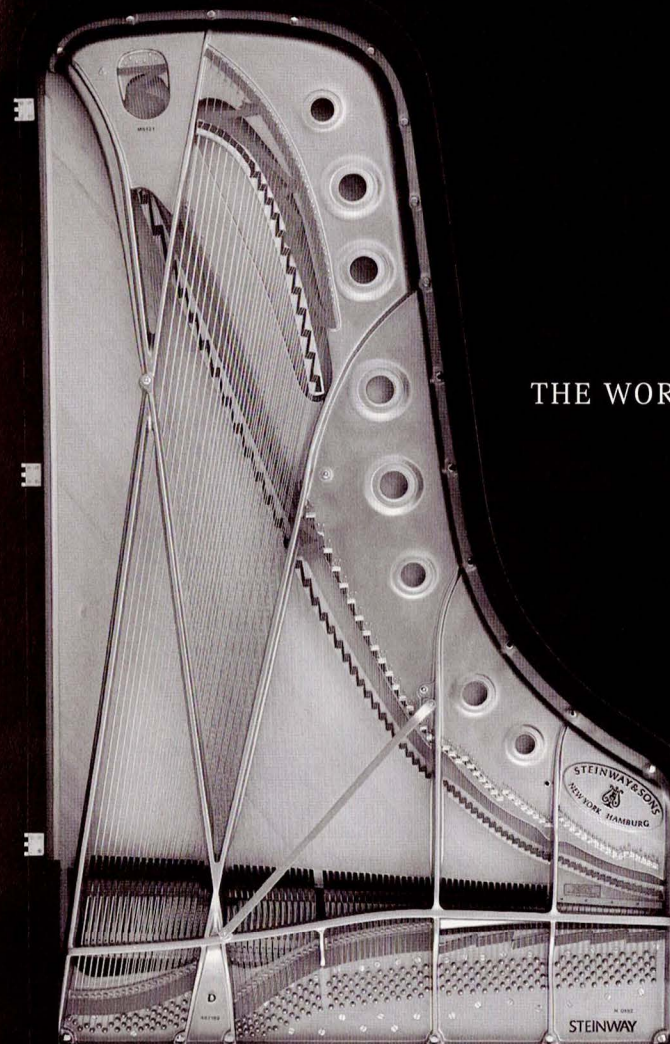
※やむを得ない事情により曲目曲順などが変更されることもあります。※開演時間を過ぎると、ご入場をお待ちいただいたり、ご自分のお席にお座りいただけない場合もございます。ご了承ください。※小学生未満のお子様はご入場いただけません。※当日学生券は公演当日残券がある場合のみ開演1時間前から当日券発売場にて各席半額にて発売。(学生証をご提示ください。)

全プログラム(12年間・全24回)を決定して臨んでいます。

詳しくはBunkamuraホームページをご覧ください。



STEINWAY & SONS



THE WORLD'S FINEST PIANO



Steinway & Sons Japan, Ltd.

Tel: 03-5251-6550 www.steinway.co.jp